

「水みちマップ」をつくるための調査研究と 井戸にみる多摩市の昔の暮らし

2003年

森岡淳子

生活者の会代表

目 次

1. はじめに	1
2. 調査の方法	2
3. ニュータウン開発の流れ	3
4. 井戸調査の新しい目的	6
5. まとめ	7

資料編

I 井戸調査の現場写真集	9
II 小冊子「多摩の井戸を探して ー調査から見えた昔の暮らしー」	

研究組織 生活者の会

代表研究者	森岡 淳子
共同研究者	石井栄美子
	小笠原敦子
	合田 芳子
	杉本 依子
	鈴木 桂子
	武内 好恵
	徳永 一美
	原田 恭子
	山田 厚子

〒206-0014

東京都多摩市乞田1227-1 トラスティ永山112

TEL 042-376-5758 FAX 042-376-8854

e-mail:office@tama-net.jp

1.はじめに

私たちの調査研究は学術的研究とは程遠く、研究というより、フィールドワークの集計と言えます。普通の市民が6年間にわたり、延べ約200人以上で、ほぼ80件の井戸や湧水のある現場に行って、直接話を聞き、計測し、写真撮影をして、調査票に記録したものです。1996年、井戸調査を始めた時には、多摩市でも水みちマップを作成すれば、近隣の市とつなげて、多摩丘陵の大きな水みちマップができるに違いない、府中市や国分寺市や調布市とおなじようなものを作りたいというのが目的でした。調査をはじめ、その年の12月に「地下に流れる水脈を探ってみよう」と「井戸調査の中間報告会」を開きました。しかし井戸の調査件数が増すにしたがい、水みちの流れが多摩市ではどうもはっきりせず、段々その目的が不可能ではないかと思いはじめました。それは多摩ニュータウンの大規模開発により、それまでの丘陵地帯が一変し、地下水の流れが分断されてしまって、地下水の流れ出る方向がはっきりつかめなくなっていることが懸念されました。しかし井戸の所有者を一軒一軒訪問すること続けながら、井戸にまつわる話や、お年よりの昔話などを聞くことにより、当初の目的である水みちマップ作成からすこし変わって、調査から見えた多摩の昔の暮らしの記録集になっていきました。

調査中に阪神淡路大震災が起き、災害時の飲料水を確保するという目的も新たに付け加え、今ある井戸が使用可能な状態にあるのかなどの関心も加わりました。

2002年に調査の集計をはじめ、多摩市の井戸の分布にはかたよりがあることがはっきりしてきました。井戸のたくさんある地区はニュータウン開発がされていない既存地区でした。大規模開発がされたニュータウン地区では、区画整理で残された谷戸にある一部の井戸のみでした。水みちマップはできなくても、私たちの6年間の調査をまとめたという思いで、冊子『多摩の井戸を探して』—井戸調査から見えた昔の暮らし—を作成しました。

2.調査の方法

井戸調査シート(別紙・1)を作成し、井戸の所有者を訪ねて、直接聞き取りし記入する方法を取りました。井戸の所有者を探す糸口として、1996年に多摩市に登録された井戸を聞きましたが、公表することはできないと断られました。ただ160ヶ所ほどあるということだけは教えてもらえました。幸いにも知人に一軒の井戸のある家を紹介してもらうことができ、これをきっかけとして、次々に所有者の紹介をうけながら調査がすすみ、1996年から2002年まで6年間で、約80ヶ所の井戸・湧き水を調査することができました。

別紙・1 井戸調査シート

井戸調査シート 1996年2月14日作成 生活者の会	調査番号	所有者	住所	調査日時	調査担当
<p>1. 現在も使っている。</p> <p>1-1 どういうことに使っていますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 飲料水(生水で飲んでいる/煮沸して飲んでいる) ・ 料理 ・ 洗い物(食器/野菜) ・ 掃除 ・ 洗濯 ・ 庭にまく ・ 池 ・ 農業(具体的に) ・ その他 <p>1-2 涸れたり、水量が少なくなったり、水の色が変わったりすることがありますか。 はい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ どの程度 ・ 原因 <p>1-3 水道水と比べてどうですか。</p> <p>1-4 定期的に水質検査をしていますか。 いいえ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ どの程度 ・ 費用 <p>1-5 防災用の井戸に指定されたら、どう思われますか。</p> <p>1-6 市から検査のための補助金があればいいと思われますか。</p>	<p>2-3 周囲の変化と関係があると思いませんか。</p> <p>3. いつ頃掘った井戸ですか。 明治 大正 昭和 年 明治前 わからない</p> <p>4. 井戸の深さはどれくらいですか？ ()</p> <p>5. 掘った時の状況がわかれば、教えてください。 わからない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 誰が掘りましたか。 ・ 何人で何日くらいかかりましたか。 ・ どういうふうに掘りましたか。どんな苦労がありましたか。 <p>6. 掘り直したことがありますか。 ない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ いつ ・ どのように ・ なぜ <p>7. 井戸の水の流れがわかりますか。 わからない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 方向 ・ 幅 <p>8. 近くに共同井戸がありましたか。 はい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ どこに ・ どんな状況でしたか。 <p>9. 井戸を持っている方をご存知でしたら、教えてください。</p> <p>10. 井戸にまつわる行事や習慣、苦労されたこと、思い出などを教えてください。</p>				
<p>2. 現在は全くつかっていない</p> <p>2-1 いつまで使っていましたか。</p> <p>2-2 なぜ使わなくなったのですか(理由)</p>					

3.ニュータウン開発の流れ

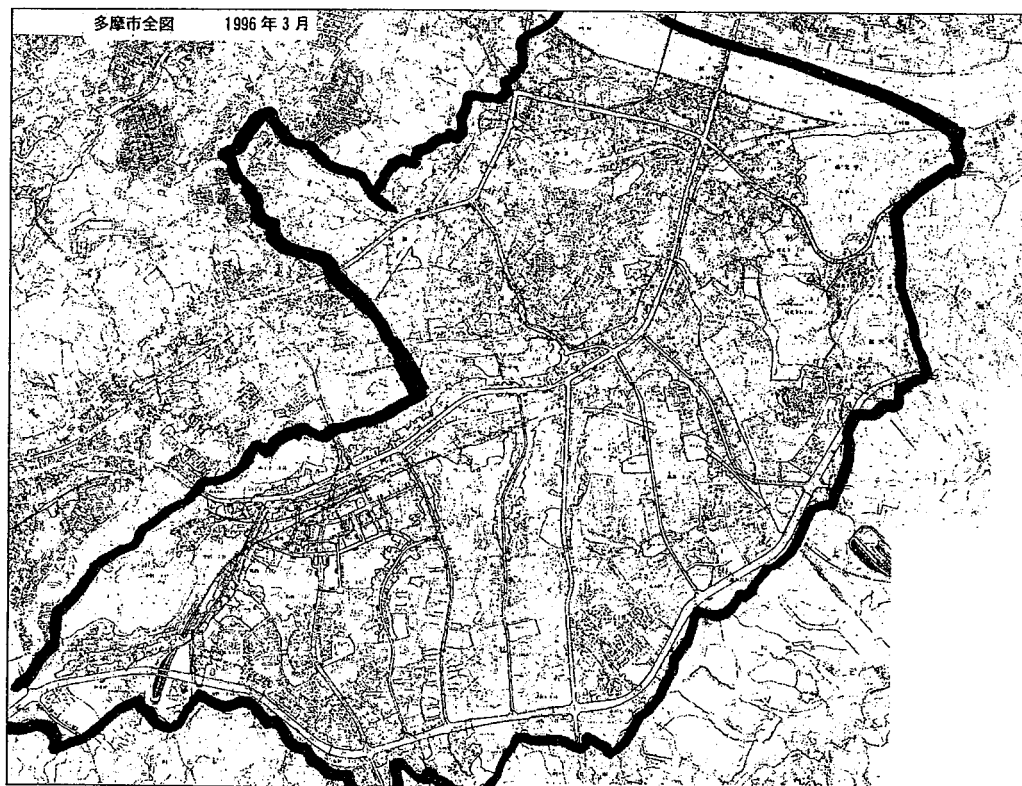
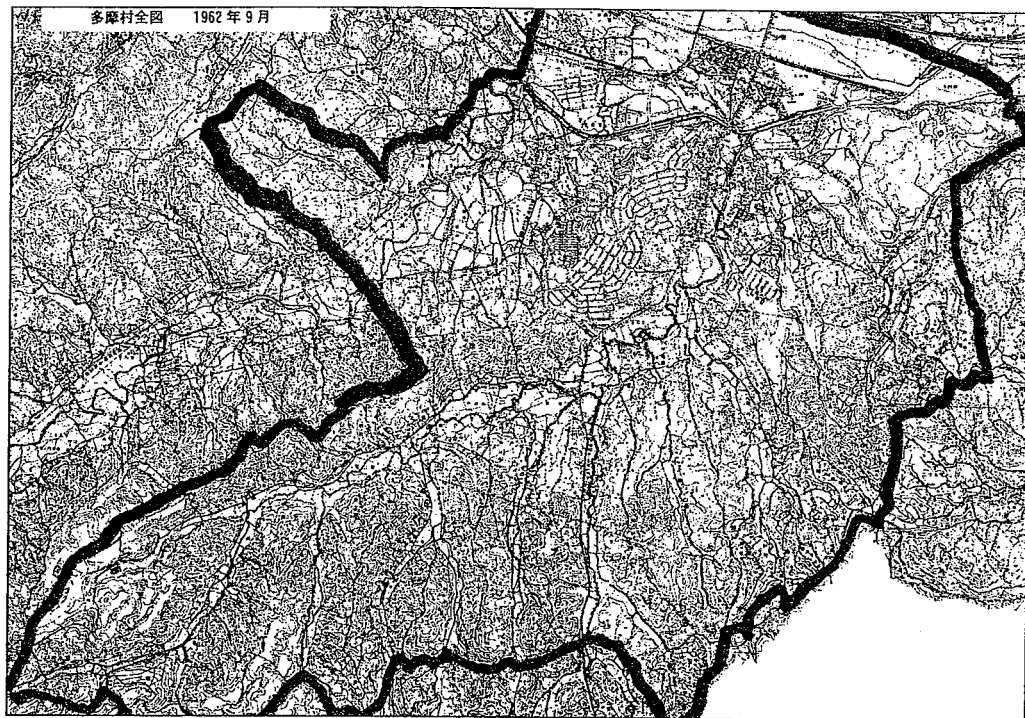
多摩ニュータウンは多摩市、八王子市、稲城市、町田市の4市にまたがって開発された街で、多摩市では約6割がニュータウン開発地区になります。水みちが分断されるほどの開発はいつからなされたのであろうか、多摩市内のニュータウン地区開発の歴史を年表(別紙・2)にしてみました。

市内の約6割を占めるニュータウン地区の開発から35年が経過し、現在多摩市の人口は14万人となっています。多摩丘陵は急激に変貌を遂げました。開発された地区には明らかに井戸は残されていません。開発されなかった既存地区でも、井戸水に大きな影響を受けました。良質な井戸も、周囲の開発で水が涸れたり、濁ったり、水質も悪くなったりしました。水道はいらないとっても、地区ごとに水道を引くので、心ならずも水道に変えざるを得なかった家もあり、一旦、水道が引かれ便利になると、井戸は忘れられがちになり、手入れもされなくなり、残念なことに、埋めてしまったところもありました。(別紙・3)

別紙・2 多摩ニュータウンの開発の年表

	人口	開発推移
1965年(昭和40年)	14,616人	新住宅市街地開発法によるニュータウン建設地区として計画決定。この前年には落合地区簡易水道及び多摩町上水道事業完成。
1967年(昭和42年)	20,631人	多摩ニュータウンの宅地造成工事、本格的に始まる。
1971年(昭和46年)	32,068人	多摩ニュータウン第一次入居(諏訪、永山地区)開始。市制を施行、多摩市となる。南永山小、永山中、都立永山高校の開校。
1973年(昭和48年)		町田市小野路町、上小山田町、下小山田町の一部が多摩市に編入し、多摩市落合の一部が町田市に編入される。オイルショックの年。
1974年(昭和49年)		多摩ニュータウンの住宅建設が再開される。上水道事業を東京都に統合。公共下水道整備工事に着手。連光寺小、北永山小の開校。小田急多摩線新百合ヶ丘～永山間開通。京王相模原線よみうりランド～多摩センター間開通。
1975年(昭和50年)	62,815人	多摩市水道事務所を桜ヶ丘4丁目に開設。北諏訪小の開校。小田急多摩線永山～多摩センター間開通。
1976年(昭和51年)		東寺方小、東永山小、南豊ヶ丘小、北落合小、西愛宕小、豊ヶ丘中が開校。
1977年(昭和52年)		中諏訪小、南貝取小、和田中が開校。
1978年(昭和53年)		和田土地区画事業に着手。諏訪中が開校。
1979年(昭和54年)		西永山小、南落合小が開校。
1980年(昭和55年)		北豊ヶ丘小、西永山中、都立南野高校が開校。
1981年(昭和56年)		東落合中が開校。
1982年(昭和57年)		人口10万人を突破。南鶴牧小、西落合中が開校。
1983年(昭和58年)		北貝取小、貝取中が開校。
1984年(昭和59年)		市役所庁舎増改築工事完了。聖ヶ丘小、西落合小、聖ヶ丘中が開校。
1989年(平成元年)		大松台小・鶴牧中が開校。
1990年(平成2年)	139,289人	小田急多摩線多摩センター～唐木田間が開通。京王相模原線多摩センター～橋本間が開通する。
2001年(平成13年)	140,502人	

別紙-3 開発前と開発後の地図

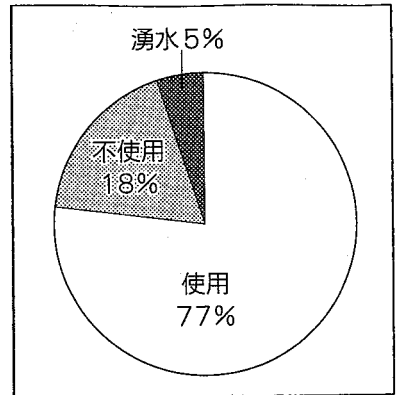


4.井戸調査の新しい目的

開発により分断された水みちの流れを探すことはできませんでしたが、私たちは多摩の昔の暮らしを知る人たちの話もまとめて井戸冊子を作成することにしました。多摩市に水道が引かれた1961年以降は、井戸水を飲用とする家庭は減少し、井戸は次第に使用されなくなりました。調査した井戸も水質が悪くなり、そのまま飲用として利用できる浅井戸は殆どありませんでした。調査中に、大切にされていた頃の、井戸にまつわる昔話や言い伝えをたくさん聞きました。たとえば、井戸の側の大木を切ると井戸の水が濁ってしまう、井戸の水神様にはお正月に水色の幣束をお供えするなどです。また、開発の時に井戸を保存したい所有者に対して、開発者は大変冷たい態度で井戸の埋め立てを強要したり、土地開発の時には必ず井戸を残すことを条件にして絶対に譲らなかった所有者の話、開発後にもらった換地に飾り井戸をつくって昔をしのんでいる話、開発後にボーリングで深井戸を掘った話など、井戸に対する人々の思いなどです。私たちが思っていたより井戸はたくさん残されていました。また地区の行事、風習、生活、自然についても色々話を聞くことができました。

これが井戸調査の新しい目的の一つになりました。もう一つの目的は、災害時の飲料水としての井戸の確保です。阪神淡路大震災の後、井戸の重要性は見直されはじめ、多摩市では、井戸を災害時用に確保するため、持ち主に登録してもらい、年間3000円の補助金を出しています。現在の登録数は62ヶ所だそうです。私たちは登録された井戸が実際に役に立つのかどうか、調査していきたいと思っています。

井戸の使用状況



5.まとめ

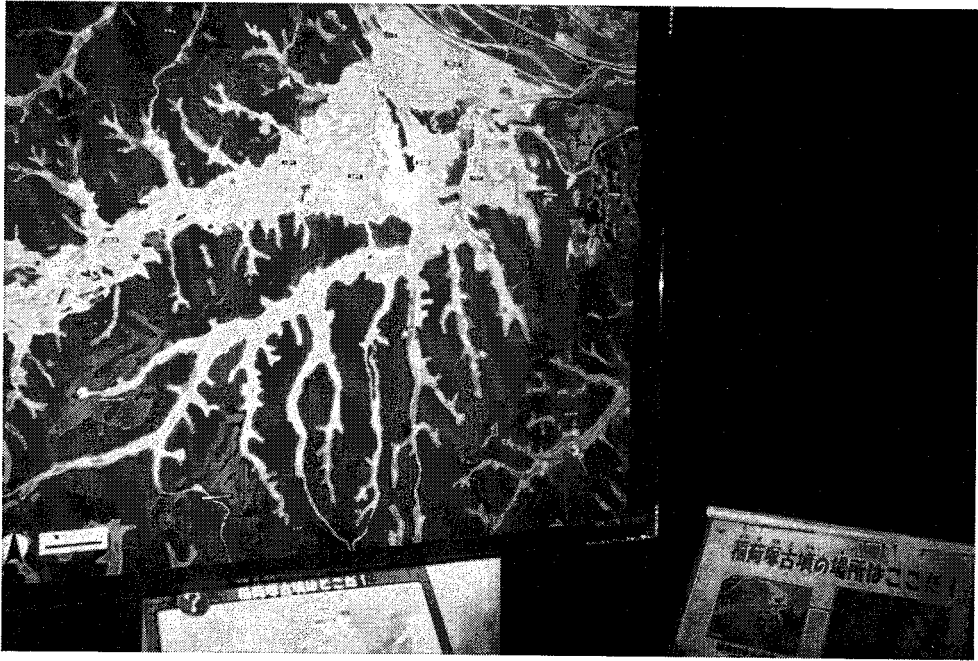
多摩丘陵は太古の昔から、地下水、湧き水、川の水に恵まれた土地でした。しかし現在多摩川のそばで暮らす私たちは、多摩川水系の水を口にすることはできません。水道水のほとんどは利根川、荒川水系です。朝霞浄水場からはるばるパイプラインで多摩川を越えてきています。多摩市の飲用水の自給率は、わずか数パーセントにしか過ぎません。今自給できている水は深井戸の取水で、丹沢水系だそうです。東京都は水道水源の約75%を群馬県や埼玉県に依存していて、自己水源である多摩川からの取水は約20%で地下水は5%です。東京都も水源自立都市をめざして多摩川の水質向上と水量の増加、そして地下水を涵養し安定した水源として確保してほしいとおもいます。水量の減少に歯止めをかけるには、山、森を保全することや雨水涵養が大切です。私たちができることに雨水涵養策があります。雨水浸透ますや、雨水トレンチ(浸水性の排水管)、浸水性舗装を普及させることです。公共施設で雨水を中水道利用することはそれほど難しいことはありません。遠くから水を調達するばかりではなく、雨水を地中へ戻し、地下水の量を増やすことで、水循環のある水源自立都市多摩市をめざしたいものです。

最後に、私たちが作成した『せっけんの話』の冊子は小中学校の環境学習の副読本として利用されていますが、この冊子も小中学校の環境学習への指針として提案したいと計画しています。

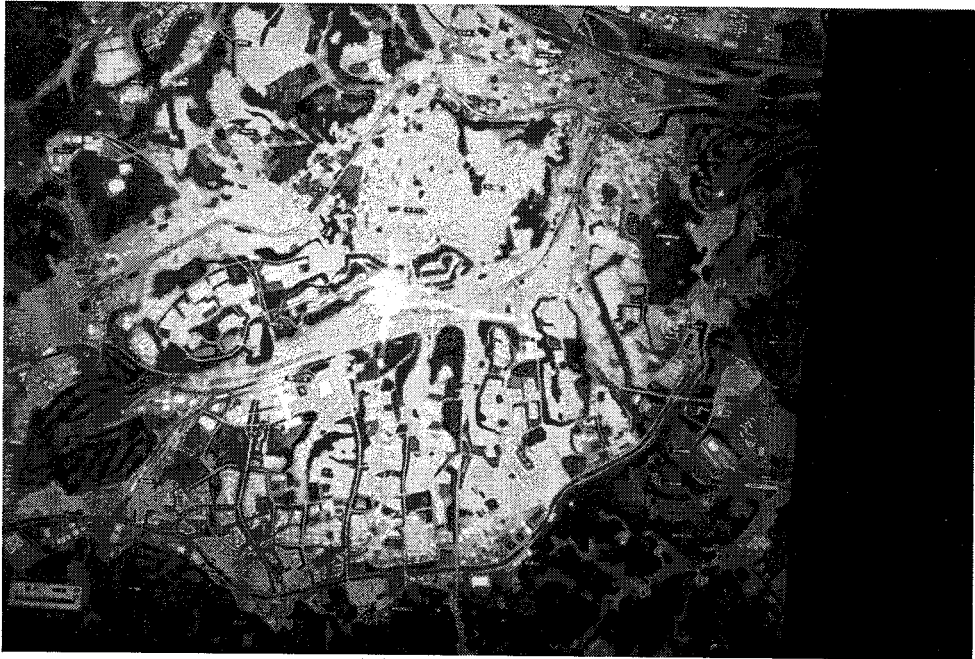
今後私たちの活動は、「多摩の井戸」から、「多摩の水」へと視点を広げる予定です。1990年から多摩市内の川、多摩川・大栗川・乞田川の水質調査活動を、月に1回のペースで継続していますので、それをまとめたいと計画しています。

資料編

I 井戸調査の現場写真集



1. 多摩ニュータウン開発前



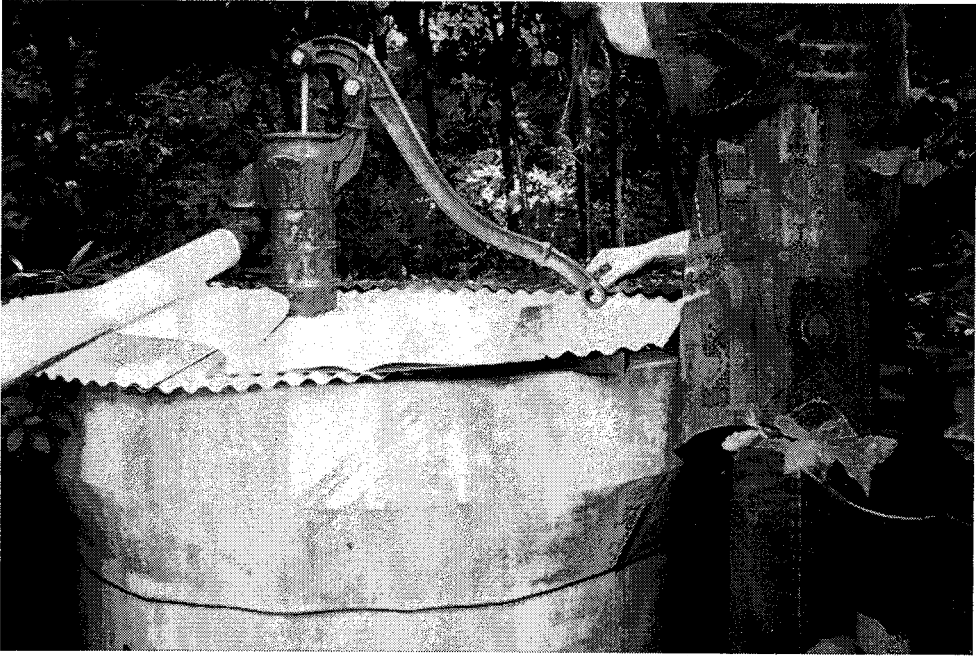
2. 多摩ニュータウン開発後



3. 多摩ニュータウン航空写真



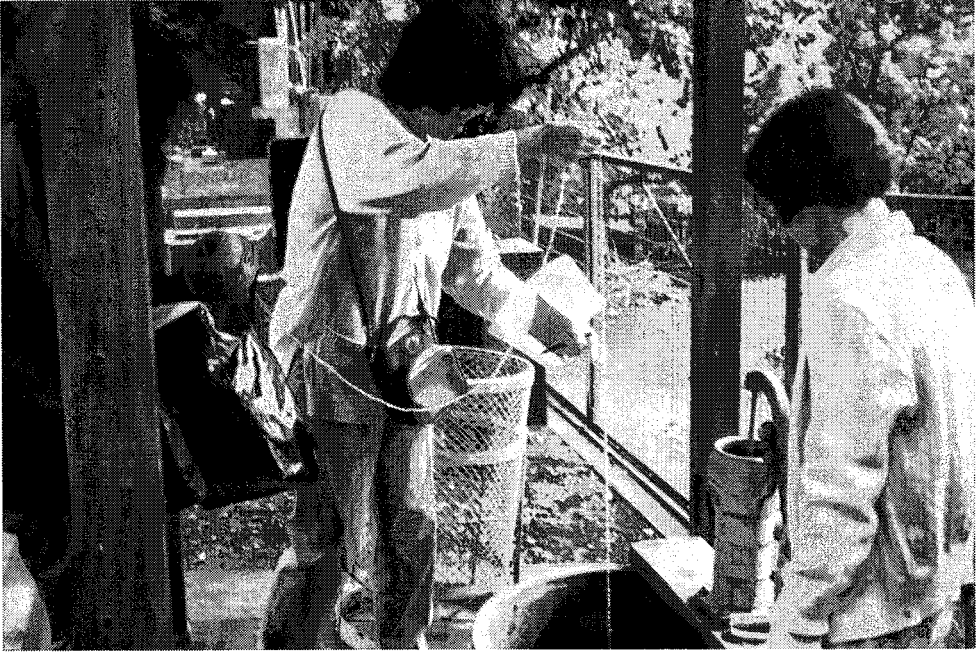
4. 現存する井戸の調査



5. 現存する手押しポンプ式井戸



6. 井戸の中の様子



7. 井戸の水位の調査（1）



8. 井戸の水位の調査（2）



9. 現在使用していない井戸



10. 埋めた井戸から流出する湧水



11. 同井戸の聞き取り
調査する会員



12. 屋根をつけ大切に保存されている井戸



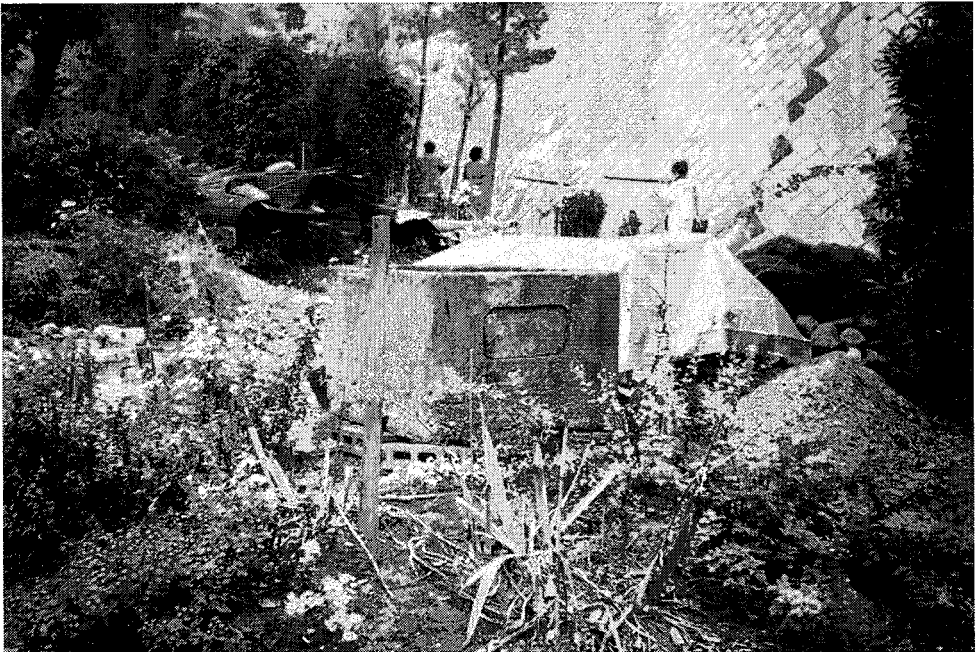
13. 小屋の中に保存されている井戸



14. 現在使用されて
いる井戸



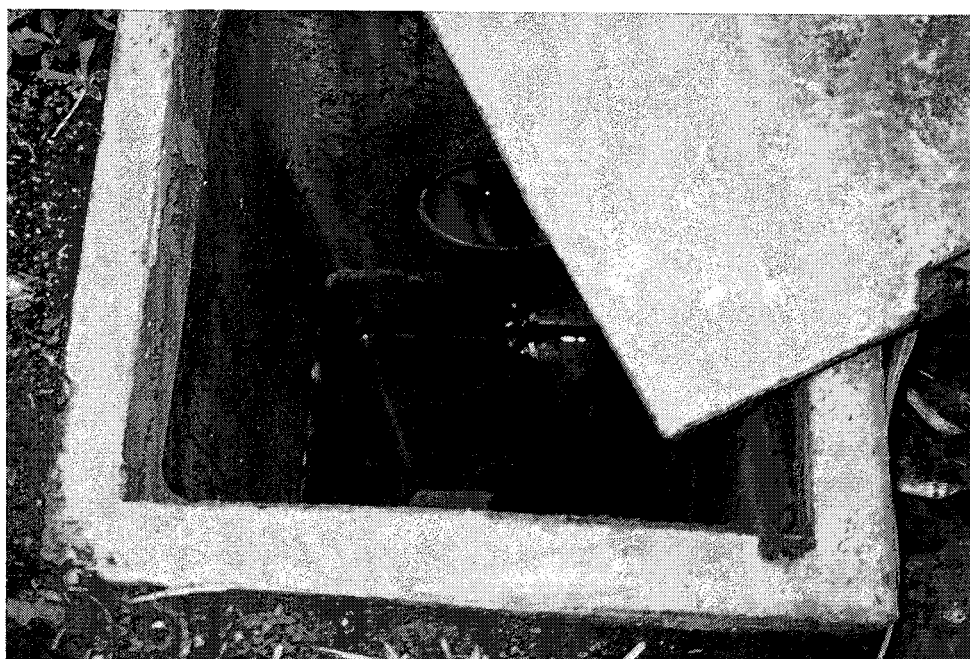
15. 屋敷内の湧水



16. 雨水を貯めるコンクリート製受水槽



17. 受水を貯めるコンクリート製受水槽（横井戸）



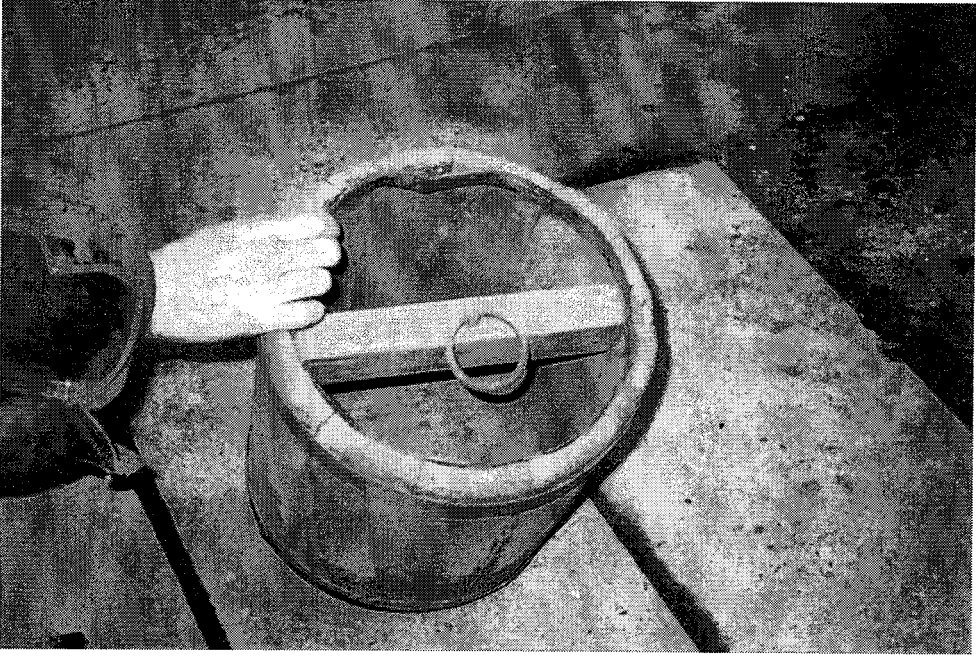
18. 同 中の様子



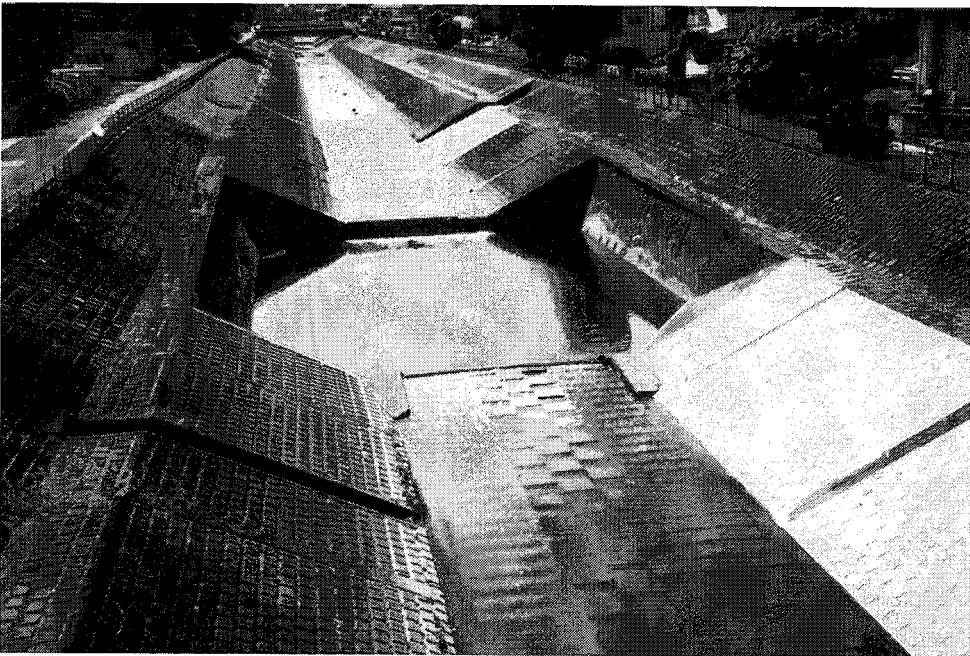
19. 湧水を集めるエンピ管（横井戸）



20. 同 集めた湧水を池に放流



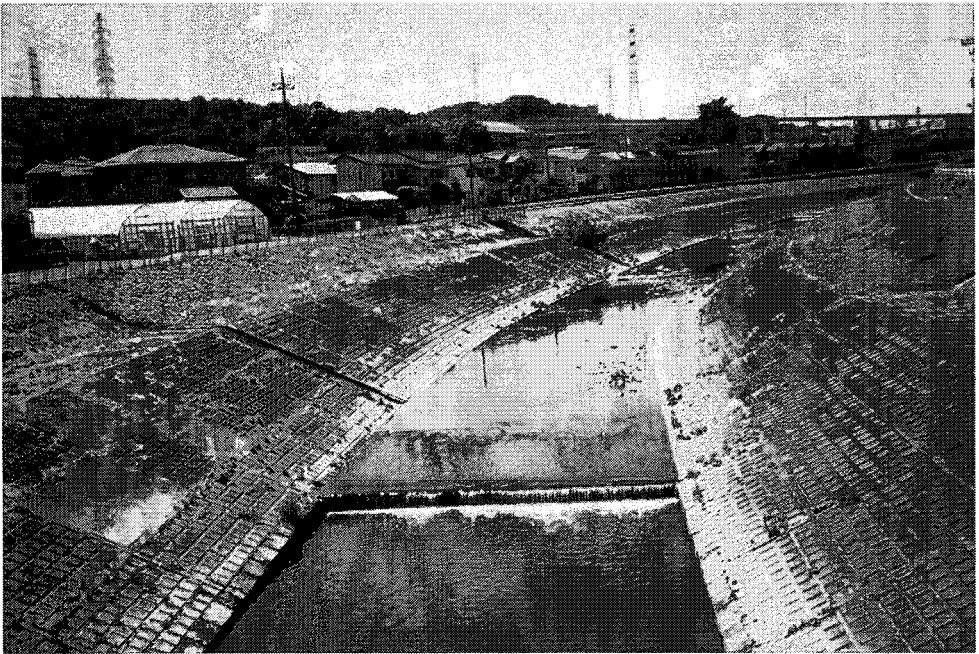
21. 昔使用したつるべ井戸用桶



22. 乞田川



23. 大 栗 川 (1)



24. 大 栗 川 (2)



25. 多摩川合流点付近（1）



26. 多摩川合流点付近（2）

「^{みず}水みちマップ」をつくるための^{ちようき けんきゆう}調査研究と
^{いど}井戸にみる^{たまし}多摩市の^{むかし}昔の暮らし」
(研究助成・一般研究VOL. 25-No.144)

著者 ^{もり おか じゅん こ}森岡淳子
発行日 2004年3月31日
発行 財団法人 ^{とうきゅう}とうきゅう環境浄化財団
〒150-0002
渋谷区渋谷1-16-14 (渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)3400-9142
FAX (03)3400-9141
